



●Kero Kero 通信●

第 314 号



崎山小児科・院内報

5 月 2025 年

最近の百日咳の流行とその対策

最近、国内で百日咳が流行しています。崎山小児科でも今年の3月以降、すでに5名の患者さんが確認されました。都立小児総合医療センターで生後1か月の百日咳の患者さんが亡くなったという報道もありました。

■百日咳の特徴

百日咳は夜も眠れないような激しい咳が特徴で、その原因は百日咳菌の感染です。乳児期に行う四種混合ワクチンや五種混合ワクチンに百日咳ワクチンが含まれているので、ワクチンを受けた人には発症予防効果が期待できます。しかし、その効果は5年から10年で弱まるので、小学生以上の小児、大人、高齢者も百日咳に罹患する可能性があります。治療としては抗菌薬を使うのですが、今回小児総合医療センターで亡くなった子どもから検出された百日咳菌は通常小児に使う抗菌薬が効かないタイプの百日咳菌に感染していたので、治療に難渋したようです。咳の治療として咳止めはほとんど効きません。

■乳児の百日咳

現在の母親はここ数年以内に百日咳に罹患していない人が多いので、免疫を持っている母親はほとんどいません。そのため、へその緒を介して胎児に免疫力を与える母子免疫は不確実なので新生児でも罹患する可能性があります。乳児の百日咳は早期診断早期治療では限界が多いため、入院加療を受けても亡くなる場合があることは以前から知られていました。五種混合ワクチンの接種対象となるのは生後2か月ですから、それ以前の乳児を百日咳から守るためには、別の手段を考える必要があります。

■乳児の百日咳の予防策

妊娠後期に母親が三種混合ワクチンを受けて、母親が作った免疫グロブリン（百日咳から体を守る抗体）がへその緒を通して胎児に移行し、乳児を守るという方法が、最も確実に実施できる乳児の予防方法です。6か月未満児の症例において推定される感染源は、兄弟姉妹が最も多く（39%）、次いで両親（父親16%、母親16%）、祖父母（7%）だったと2021年に国立感染症研究所が報告しています。出産を控えているご家族では、小学生以上の小児、父親、祖父母も三種混合ワクチンを接種しておくといでしょう。

■妊娠している母親への推奨

妊娠しているお母さん方に、妊娠8か月頃に三種混合ワクチンの接種をすることをお勧めします。希望の方はご相談下さい。



赤と青



男の子は青、女の子は赤、のようにいつの頃からか色のイメージを自然に刷り込まれていましたが、いつからそのようになったのでしょうか？日本でこの2色で表されていてよく目にするのはトイレのマークだと思います。色で判断して赤はどちらのトイレだけ？と考えることもなく入る方も少なくないと思います。

古くは18世紀のヨーロッパ、男性は赤を身に着けることが多く、特に貴族が赤を好んでいたため、庶民たちは上流階級への反感を表すように、貴族が身に着けている「赤」の反対の「青」などシックな色を身に着けるようになりました。一方、庶民の女性たちは明るい「赤」などを身に着けるようになります。この出来事が男女の色分けのきっかけと言われています。

日本では遡ること60年ちょっと。1964年の東京オリンピックの際に、トイレのマークを作成したグラフィックデザイナーの方がこのイメージをピクトグラムに採用したとされています。アメリカの子どもが男の子は青色の服、女の子は赤色の服を着ているのを見て、この色分けが万国共通だと思い、提案されたようです。

近年では、ジェンダーレスの考え方が広がり、赤色＝女性、青色＝男性という固定概念は薄れてきています。また、トイレマークも各施設の雰囲気に合わせて、スタイリッシュなデザインが増えてきていますが、色弱者には分かりにくい場合もあるため、色分けだけでなく、文字も添えることで、より分かりやすく配慮もなされています。一方、ジェンダーレスやジェンダーフリーという言葉が浸透しつつある社会で「かわいい」や「カッコいい」に振り切ったモノ自体が消えてしまい、悲しむ人がいるという事実もあります。長い歴史の中で構築された色に対する固定的なイメージは簡単に崩れるものではありません。どれがいいか悪いかではなく、みんなの“好き”が共存していける社会であるといいなと思います。



日本脳炎ワクチンの受けもれはありませんか？蚊の季節になる前に接種をおすすめします・おたふくワクチン不足中です